

# 通信メディア利用と社会的ネットワーク

中 村 功

## はじめに

19世紀末の電信の登場に始まる通信メディアの電気化は、物理的空間を超越した即時的コミュニケーションをはじめて可能にした。そして現代では通信技術の発達とコンピュータテクノロジーとの融合によって、空間や時間を超えたコミュニケーションはますます円滑化してきている。こうした通信メディアの発達によって、対面的世界とは異なるメディア上の世界が急速に発達してきた。その具体的な例としては、コンピュータ・ネットワーク上の電子会議、伝言ダイヤル、テレフォン・クラブといった匿名的コミュニケーション、ポケットベルでのメッセージ伝達、長電話、電子メールなどのパーソナルなコミュニケーション、あるいはテレビ会議やサテライトオフィスといった業務的コミュニケーション等があげられる。

このように進展する情報化社会においては、どのような人間関係が想定されるのであろうか。第一の考えは、電話によって成立する「サイコロジカル・ネイバーフッド」(Aronson, 1971)や「メディア・コミュニティー」(Gumpert, 1987)等の延長上に考えられる、完全にバーチャルな人間関係像だ。すなわち通信メディアは対面接触を代替するので、物理的接触は必要でなくなり、メディア上だけの人間関係が肥大化していくという考えだ(メディア代替説)。これを個人レベルにおきかえると、対面接触は不活発でメディア上の人間関係だけが活発な「メディア人間」が誕生することになる。

その一方で、メディアを通じたコミュニケーションは対面的コミュニケー

ションとは異質であり、メディアによる代替はできない。メディア・コミュニケーションは対面的コミュニケーションとセットになっており、その補完的役割を果たしているに過ぎない、という考え方もなりたつ(メディア補完説)。これを個人レベルで言うと、メディア上の人間関係が活発な人は同時に対面接触も活発であり、対面関係と平行してメディアをうまく使いこなす「メディア使いこなし人間」が想定される。

一体どちらの考えが現実的なのだろうか。利用されるメディアや状況によってもそれは異なるだろうが、ここではすでに一般的に利用されている通信メディアである電話と、若者に人気のポケットベルを取り上げ、どのような対人ネットワークを持つ人がこれらのメディアをよく利用するのか、という問題を検討することによって、以上の問題に接近したい。たとえば知り合いが遠くに住んでいたり、多様であったりして、対面的接触がしにくい人が、その代替として通信メディアをよく利用しているのか。あるいは逆に地理的に近く、一般的な対人ネットワークを持つ人の方が対面接触も多く、通信メディア利用が活発なのだろうか。

ここではまず、対人ネットワークを総合的にとらえる方法を学ぶために近年発達してきた社会的ネットワークの考え方を取り上げる。次にこれを参考にしながら1994年に松山大学の学生を対象に行った調査を中心に、社会的ネットワークの様態と電話・ポケットベル利用の様態との関係を明らかにする。そしてさらに上記学生調査をもとに、社会的ネットワークの様態以外の諸状況も加えた上で、どのような要因がメディア利用と関わっているかを総合的にとらえ、相対的に社会的ネットワークがメディア利用へ与える影響を考えていく。

## 1. 社会的ネットワーク研究

### (1) 放射性と異居近親関係

どのような人間関係を持つ人が電話をよく利用するか、という問題を扱った研究はこれまであまりないが、様々な分野で断片的な研究がなされている。例

えばメディア研究においては Danowski (1986) らの研究がある。彼らによると人間行動の理解には、コミュニケーションの量や友人数や接触頻度などと並んで、インターパーソナル・コミュニケーションの構造が重要であるという。彼の指摘する構造とは人間関係の多様性のことで、それは人間関係の「放射性」(radiality) という用語で表される。放射性は、ある人が会話を交わす相手の人がお互いにどの程度話すかによって規定され、ある人の親しい人同士が互いに話すほどそのネットワークは「インターロッキング」(interlocking) であり、そうでないほど「放射的」(radial) となる。放射的な人間関係は多様な人々を含んでおり、逆にインターロッキングなネットワークは同質的で似たような行動様式を持ち、集団規範が働きやすい。調査方法は被調査者に最もよく話す人を3人挙げてもらい、被調査者とその3人の話す頻度と挙げられた3人同士の会話頻度を尋ねる。この合計6の関係の会話頻度が多いほどインターロッキングなネットワークで少ないほど放射性のネットワークということになる。その結果、放射状のネットワークを持つ人はそうでない人に比べてマスメディア利用が少なく、かわって電話利用が多いことがわかった。同様に、Cook (1982) がシカゴのパブリックリレーション関係の業務の従事者に調査したところ、より放射的なネットワークを持つ人は業務上でより多くの電話をしていた。また Danowski (1982) によれば職場では放射性が高い人ほど電子メール(1対1および1対多)の利用が多く、また音声による電子会議の利用も多かったという。一方家庭では放射状のネットワークを持つ人は遠距離通話をより多くかけることが明らかになったという (Danowski, 1985)。いずれにしても放射的で多様な人間関係の中にいる人は通信メディア利用度が高いということだが、これについて Danowski は2つの理由をあげている。第一に、多様な人とつきあう人は共感能力が高いために、限られた情報から他人を解釈する能力を必要とするメディアエイトッド・コミュニケーションを使いやすいこと。第二に放射状のネットワークは地理的に離れがちで、したがって通信手段を必要とする、というものだ。これらの理由づけにはともに証拠は提示されていないが、もし後者の理由づけ

をとるなら、Danowskiらの研究は多様性が対面接触を制限することで通信メディアニーズを生むということで、メディア代替説の考えにつながるものと言えるだろう。

一方、人間関係を中心にした研究で通信メディアを扱っているものの一つに家族社会学における異居近親関係の研究がある。Sussman (1953) や Litwak (1960) によると、産業社会の進行にともない人口移動が激しくなり、かつてのように拡大家族が一つの家に住むということがなくなり、核家族が結婚や仕事をきっかけとして分散して住むようになったが、それらはバラバラに孤立しているのではなく、互いに関係を維持し続けているという。このような親族関係を Sussman は「拡大都市家族」、Litwak は「変形拡大家族」と呼ぶ。そこでは訪問・サービス提供・経済的援助などと並んで電話によるコミュニケーションがごく一般的に行われており、関係の維持に電話が一定の役割を果たしていることが分かっている。

同様の研究として関(1977)は、札幌市の公営住宅の70世帯を調査し、親族間の交際内容を調べている。その結果、ここ一か月で親族を訪問したことのある世帯は94.2%で、電話をしたことのある世帯は98.6%に達し、電話と訪問が最もよく行われていた交際内容であった。注目されるのはよく会う相手ほどよく電話するという傾向があることだ。すなわち毎日会う親族にここ1か月間で電話をかけた世帯は56%であったが、ここ6か月から1年間の間にあった親族には20.1%しか電話をかけていなかった。この事実は地理的に拡散しているネットワークを持つ人がより通信メディアを必要とするという考えとは逆の考え、すなわち近くに住み頻繁に対面接触をする人は同時に通信メディア利用も多い、というメディア補完説を支持しているように思える。

同様の事例は他の親族関係にも見られる。かなり特殊な状況下だが、刑務所に入れられた夫と家庭にいる妻とのコミュニケーションがそれだ。Fishman (1988) は米バーモント州の刑務所の受刑者19人へインタビュー調査を行い、電話が親族間のつながりを維持するのに役だっていることを発見した。そこでは

自宅から遠くの刑務所に収監された受刑者は差し入れや面会頻度が少なく、そうした受刑者は電話の頻度も少なく、不定期であることが発見されている。

以上紹介した諸研究をみると、その示唆するところはバラバラであるように見える。人間関係の放射性（多様性）の研究では、多様な人間関係をもつ人ほど対面接触が制限されるため電話利用が盛んであるらしい。ここからは対面接触が少ない代わりにメディア接触が多いという「メディア人間」の可能性が示唆される。しかしその一方異居近親関係の研究では、よく会う親族の間でより頻繁に電話がなされるといい、そこからはむしろ「メディア使いこなし人間」の可能性が示唆される。

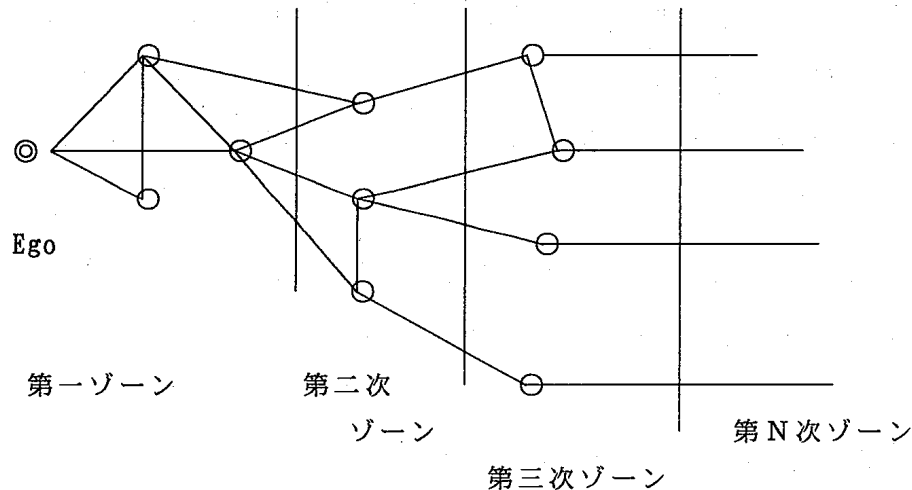
しかし各研究に共通して言えることがある。それはいずれの研究においても、人間関係の捉え方が部分的であるということだ。Danowskiらの研究では人間関係の多様性（放射性）だけを取り上げ、つきあっている人の数とか、対面接触の頻度などは無視されている。一方、家族社会学では前者より多面的に人間関係を捉えているものの、人間関係は親族だけに限定されている。そこで、人間関係をより総合的にとらえる視野が必要となる。

## (2) 社会的ネットワーク (social network) 研究

社会的ネットワークとは「個人が他者と取り結ぶ関係性の総体」（『新社会学辞典』）と規定され、人間関係を総合的にとらえようとする概念である。実証レベルでは個人を中心として広がるネットワークを対象とするので、これはパーソナル・ネットワークとも呼ばれる。研究の多くは親族、近隣、同僚、友人など世帯外に広がる第一次関係に焦点を当てている。社会的ネットワークの研究の源流の一つには1930年代にはじまったソシオメトリー研究があるが、もう一つの源流にはBarnes (1954) や Bott (1957) らの社会人類学・家族社会学の系譜がある。Bottの夫婦の役割関係に及ぼす友人・隣人・親族など社会的ネットワークの影響の研究や、Barnesのノルウェーの漁村の階級構造の研究などは、社会的ネットワーク研究の古典とされている。

ここでは社会人類学の系譜を中心に、社会的ネットワークの特質はどのような要素によって把握されるのか、を検討する。社会人類学では、社会的ネットワークを分散している点（個人）が線（社会関係）によって連結されている状態とみる。各個人を中心にする、そこから複数の線が放射状あるいは星（star）状に伸びている。個人から1ステップで到達される範囲が第一次ネットワークゾーンと呼ばれ (Boissevain, 1974), その連結の組を「第一次星型結合」(Mitchell, 1969) という。そして2ステップの範囲が第二次（ネットワーク）ゾーンで、さらに第三次、第四次とネットワークは広がっていく。

図1 個人ネットワークの広がり (Boissevain, 1974, p. 48)



様々なネットワークは大きく言って構造上の規準と相互作用上の規準によって特徴づけられる。Boissevainによれば、構造上の規準には規模、密度、連結度、中心度、クラスターがある。規模とはそのネットワークに含まれる人間の数である。彼によれば構造上の規準ではネットワークの規模が最も重要であるにもかかわらず、今までの社会学的研究では限定された状況の中での部分的なネットワークを対象にしてきたので、規模の問題は全く考慮されてこなかったという。確かに Mitchell (1969) などでは構造上の規準に規模は入っていない。リンクには顕在的リンクと潜在的リンクがあるが、潜在的リンクまで含めると、ある個人の第一次ゾーンだけでも数百から数千の規模になってしまう。一方、

社会人類学者が注目してきた中心的規準は規模よりもネットワークの密度である。密度とは成員たちが当人を経由せず互いに接触している度合いのことで、操作的には「人々の間に存在すると想定されるリンクのうちそれが実際に存在している度合い」(Boissevain, 1974, p. 63)と定義される。これは次のような簡単な計算式によって求められる。密度 $=200 \text{ Na}/\text{N}(\text{N}-1)\%$ ここでNaは顕在化しているリンクの総数(自己中心的ネットワークの場合はエゴとのリンクは除く)で、Nはネットワーク内の総人数である。たとえば図1の第一次ネットワークの密度は $200 \times (2)/3 \times (2) = 66.6\%$ となる。だれでもがお互いをよく知り合っているところでは密度が高く、コミュニケーションが存在する可能性も高い。連結度とは、各人が他者と有する関係の平均数のことで、 $2 \times \text{Na}/\text{N}$ で表される。中心度とはある成員がどれだけネットワークの中で中心的な存在かを表し、全成員から他の全成員への最短距離の総和/エゴ人から他の全成員への最短距離の総和として計算される。ここで総和とはステップの数の総和ということである。そしてクラスターとはあるネットワークの中で相対的に高い密度を持つ分節体のことである。

一方、相互作用上の規準には多重送信性、内容、流れの方向、頻度、継続期間などがある。多重送信性とはリンケージの多様性のことで、ある人とのつながりにおいて、たとえば親族であると同時に仕事仲間でもあり隣人でもある、などというように、多くの役割が重複している場合は多重送信的(multiplex)ということになる。内容とは金銭、愛情、情報などリンクを通じて取り引きされるものである。流れの方向とは交換される内容が動く方向のことである。頻度とはリンクの間の相互作用の頻度のことである。

こうした社会人類学のネットワークの捉え方はグラフ理論を参考にしながら発達してきた。それはある社会を分析するために使われるが、その方法は社会人類学的なフィールドワークを前提としている。従って特に第一次ゾーンを越えてのネットワーク分析は質問紙調査にはなじまない。これは社会人類学では個人が分析の中心なのではなく、社会が中心的対象であるという点を反映して

いる。ただ個人を中心に考えた場合でもメディア利用と関連しそうな基本的なネットワークの特質がいくつか含まれている。たとえばネットワークの規模、密度、相互作用の頻度などは、特に通信メディア利用と関係しそうであるし、質問紙調査にもなじみそうだ。従ってこれらは、人間関係とメディア利用の関係を明らかにするための質問紙調査を行なう場合にも、取り入れる必要があるだろう。

## 2. 都市化と通信メディア利用

社会的ネットワーク研究は1970年代にはいると都市社会学で導入され、実証的研究が蓄積されてきた。その代表者としてFischerやWellmanがあげられる。周知のようにWirthらは都市化によって近隣関係や親族関係が衰退しコミュニティが崩壊していく、というアーバニズム論を展開した。しかしその後1960年代には大都市にさえパーソナルな結びつきや、第一次関係が豊富に存在するという実証的研究が行われ、都市の人間関係が希薄であるとする考えは否定されるようになってきた。こうした流れを受けて、WellmanやFischerらはネットワーク分析を使ってアーバニズム論を再検討しようと試みたのである。

例えばWellman(1988)は、都市における人間関係に関する今までの議論を、コミュニティ崩壊(Lost)説、保存(Saved)説、解放(Liberated)説の3つに分けた上で、ある地区(カナダのトロントの中心地の住宅街である東ヨーク地区)がどれに当てはまるかを調査検討した。ここで前二者はコミュニティを連帯的で地域的で家族的なものとする前近代的イメージで捉え、それが崩壊しているとか保存されているかを問題とする。前者にはWirth(1938)、後者にはGans(1962)の研究が含まれる。一方解放説では、安くて効率的な移動手段や通信手段が地域をこえた人間関係を維持させ、大規模な専門化と個人の移動性がコミュニティを地域から「解放」した、と論じている。ここにはWebber(1964)のほか、WellmanやFischerらが含まれる。



調査の結論は、それぞれの仮説はある面では現状と適合的だが他の面では異なっており、どの説にもぴったりとは当てはまらない、というものだった。たとえば日常的につきあう人の数が数人しかいない点では崩壊説が当てはまるが、つながりが安定的な点や、親族とのつながりが残っている点では存続説が当てはまるようだ。しかし、つながりは大人になってからせいぜい10年程前に作られたものである点、ネットワークでは友人が重要である点、電話や車によってネットワークは地域外に広がりを持つ点、などは解放説を支持していた。

この調査の実施は1978年で、33人の住民に対する深層インタビューがなされ、現在つきあいのある人をすべて思い出してもらった。これまではコミュニティーを狭い地域内に限定して、さらに近隣関係、親族関係、職場関係等に分けて捉えていたが、彼はそれらの限定を解除して個人が取り結ぶ人間関係を社会ネットワークの観点から総合的に捉えようとしたのである。その結果、総数で403、主観的に「親密なつながり」が164、対面、電話、アマチュア無線などで少なくとも週に3回以上接触する「日常的つながり」(Routine ties)が96あり、人々のコミュニティーは失われてはいないし、孤立してもいないことがわかった。

それぞれの間人間関係がどのようなコンテキストで行われるかを調べたところ、表1のようになった。ここから東ヨーク地区は「ストリート・コーナー・ソサエティー」ではなく「プライベート・ホーム・ソサエティー」であることがわかる。すなわちネットワークの成員の大部分がお互いの自宅内で会っているのである。二番目に広く使われるコンテキストが電話による接触である。自宅と同様に電話は通常同時的には2つの家庭を巻き込みながら、小規模で自発的な個人的相互関係をはぐくむ。同様に週末や休日を過ごす別荘でも多くの人たちが接触している。その一方で街角やボランティア組織などネットワークを広げるようなコンテキストでの接触は少ない。一方、利用されるコンテキストの種類は多様ではない。最頻値ではコンテキストの数はそれぞれ3—4である。これは典型的には自宅と電話での接触がベースになり、その他に2つ以内のコ

ンテキストが加わるということだ。たとえば同僚では職場に、隣人では近所に、拡大親族では手紙・葉書に、そして友人はスキーとかプールといったインフォーマルな集まりに限定されがちである。ネットワークはコンテキストにより特殊化されておりコンテキストが変わるとネットワークも変わるようだ。

表1 接触のコンテキスト (%) Wellman(1988)

	全 体	直系親族	拡大親族	友 人	隣 人	同 僚	組 織
自宅	88%	97	94	91	88	54	47
別荘	18	17	26	25	7	7	0
職場	14	10	1	11	5	96	11
近所	24	11	5	14	87	4	17
インフォーマルな集まり	33	28	18	43	43	36	22
組織	16	9	6	14	25	25	72
電話	85	96	76	91	74	72	80
手紙葉書	62	69	58	69	52	48	47
接触実数	383	88	88	96	68	28	15
コンテキスト平均数	3.1	3.2	2.4	3.3	3.3	3.2	2.5

ネットワークのメンバーの居住地と距離を尋ねたところ、ほとんどの相手は9マイル以上離れたところに住んでおり、1マイル以内に住む相手はわずか22%であった(表2)。ここからネットワークが地域的住民グループではないことが分かる。従って大抵のネットワークメンバーとつきあうためには短いドライブか市内電話をする必要がある。しかしメディアとの関連で重要なことは次の点だ。すなわち日常的接触の相手の41%は1マイル以内に住んでおり、(もし同僚を同じ所に住んでいるとして計算するとその数字は66%となる。) 逆に電

表2 ネットワークメンバーへの距離 (%) Wellman(1988)

	一般的つながり	親密なつながり	日常的つながり
同一ビル・ブロック(-0.1マイル)	17%	10%	36%
近隣(0.2-1マイル)	5	8	5
地下鉄市内(1.1-30マイル)	45	50	54
オンタリオ中南部(31-100マイル)	13	17	4
それ以遠	21	15	0

話が日常的接触を可能にしているにも関わらず、日常的接触の相手のわずか4%が30マイル(通常1時間の移動距離)以上離れたところに住んでいるに過ぎない。ここから、ネットワークの距離は電話と対面両方の接触量を減少させることが示唆される。

接触頻度は(最頻値として)2週間に1度というのが標準的である。表3はモード別の接触頻度を示しているが、電話での接触より対面接触が多くなっている。親密な相手とは電話での接触が多くなり、接触頻度総数でも週に1回程度の接触が標準的と多くなっている。親密な関係で電話接触が増えるのは、親密な関係には隣人が少ないことと、職場・近隣・親族などとの対面接触にくらべて電話での接触はより自発的な場合が多いためとされる。ここで注目されるのは対面接触と電話での接触が正比例していることである。人々は対面、電話どちらでも手近な手段を使うし、一方が他方の接触を誘発することもある。

表3 モード別接触頻度(日数/年間) Wellman(1988)

	一般的つながり			親密なつながり		
	対面	電話	総数	対面	電話	総数
低接触頻度グループ(下位1/4)	6	2	15	12	6	26
中接触頻度グループ(最頻値)	21	12	48	24	24	66
高接触頻度グループ(上位1/4)	52	52	128	59	52	209

総数には手紙、葉書、アマチュア無線なども入っている。

Wellmanによれば、親密な紐帯のほとんど、および多くの活動的紐帯の維持に自動車が必要な役割を果たしている。大抵のネットワーク・メンバーはちょっとしたドライブの距離に住んでおり、こうしたホームタウンに住む人とは緊密な関係を保っている。電話もよく使われるが、補足的な役割しか果たしていないようだ。Wellmanの調査結果からは電話だけで維持される人間関係はほとんど存在しないようにみえる。この研究は範囲が狭く対面接触が多い社会的ネットワークを持つ人に通信メディア利用が多いという、メディア補完説を支持しているといえるだろう。

### 3. 社会的ネットワークの様態と通信メディア利用

どのような社会的ネットワークの特徴を持つ人が電話やポケットベルといった通信メディアをよく利用するのだろうか。ここではネットワークの規模、密度、頻度、そして範囲（住居の距離）について、アンケート調査の結果をもとにメディア利用の様態との関係を検討する。調査は、1994年9月に松山大学における授業参加学生510名に対して、自記式の質問紙調査を行った（以下本調査を94年調査と略す）。被調査者の性別は男性が50.5%、女性が49.5%であり、学年は1年生52.8%、2年生18.3%、3年生20.1%、4年生8.9%であった。主な質問項目は各種メディアの所有及び利用頻度、社会的ネットワークの様態、行動特性などである。メディア利用をそれぞれ、高レベル群（H群）と低レベル群（L群）の2つに分け、ネットワークの様態を比較する。すなわち電話頻度では、ほぼ毎日する人をH群、それ以下の人をL群とし、電話利用時間では、1回あたりの平均通話時間が30分以上の人をH群、それ以下の人をL群とした。ポケットベルの利用では、ポケットベルを「月に1回以下」以上利用する人をH群、それ以外をL群とした。H群の割合は、電話頻度で40.6%、電話時間で40.0%、ポケットベルで14.9%であった。

#### (1) 規 模

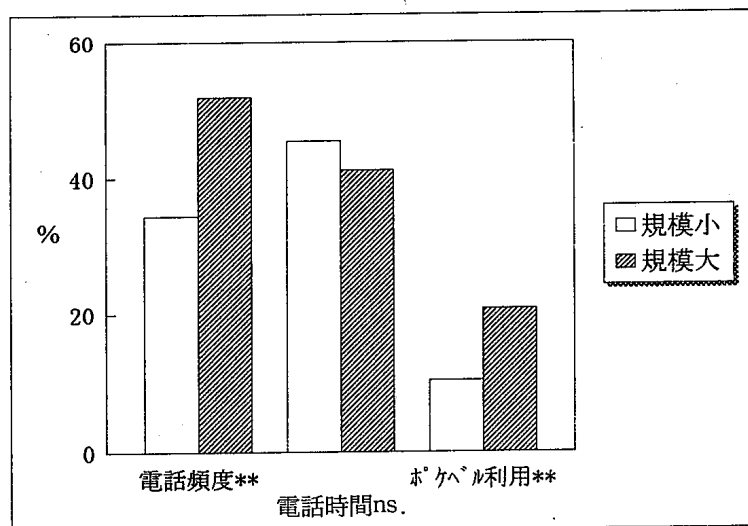
94年調査では社会的ネットワークの規模として個人的に対面的につきあっている人の数を以下のように聞き、それと各種通信メディアの利用及び欲求との関係を検討した。具体的な質問文は以下の通りである<sup>1)</sup>。そしてつきあっている人の人数を合計し、ほぼ半数ずつになるように高レベル群と低レベル群に分け、クロス集計およびカイ自乗検定を行った。

問5 あなたが前期期間中（1994年4月1日から9月19日までの間）、1回以上一緒に出かけた人は何人いますか。松山大生、家族・親戚、それ以外の人

に分けて答えて下さい。(ただし出かけたとは、個人的に誘いあって、食事、飲酒、ドライブ、買い物、映画、カラオケ、スポーツ、コンサート等に行ったことと考えて下さい)

ネットワーク規模の大小で電話頻度を比べると、規模が大きい人では電話頻度が高い群の人が51.8%いたのに対して、規模の小さい人では34.4%しかいなかった。その差は1%以下の水準で有意であった。やはりネットワーク規模が大きく、多くの人とつきあう人は電話をする頻度が高くなるのである。しかし1回あたりの通話時間の長い群はネットワーク規模の大きい人で41.4%、小さい人で45.4%おり、統計的な有意差はなかった(図2)。一方ポケットベル利用者はネットワーク規模が大きい人では20.8%いたのに対し、小さい人で10.3%しかいなかった。この差は1%水準で有意であった。ここから、つき合いの広い人のほうがポケットベルを利用する傾向があるといえる。

図2 ネットワーク規模とメディア利用(レベルHの割合)94年調査 (ns.:  $p > .05$  \*\*:  $p < .01$ )



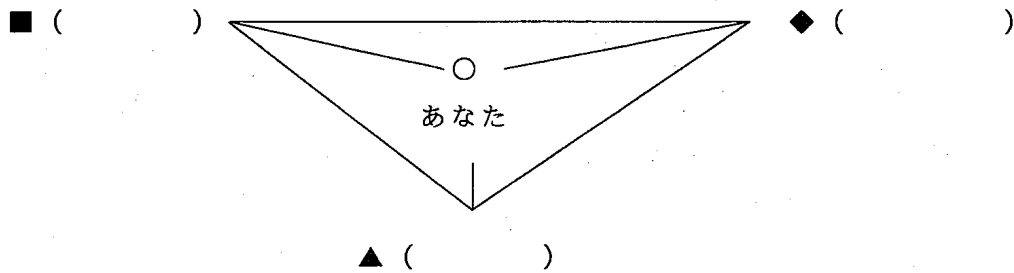
## (2) 密度

すでに述べたが、ネットワークの密度とは社会人類学では成員たちが当人を經由しないで互いに接触している度合いのことである。あるネットワークの成員がお互いに知り合いであればそのネットワークは密度が高いということにな

る。この概念は Danowski らの人間関係の放射性的概念とほぼ同様の概念と言える。すなわち当該の社会的ネットワークがどれだけ緊密で一様か、それとも多様でバラバラかを示す概念である。たとえば小さな村落共同体に典型的に見られるように、つきあっている人々がお互いに知り合いであれば密度が高い社会であり、同時に放射性が低く一様な社会であるといえる。両者が異なる点は測定法にある。第一に社会人類学では集団全体を扱っているのに対して放射性は個人を中心とした第一次ゾーンに限定されていること。第二に前者が知り合いであるかどうかを基準にしているのに対して後者ではコミュニケーションの頻度を基準にしている点が異なっている。

図3 ネットワークの密度および頻度を調べる質問 91年調査

問14 あなたがふだん最もよく話す人を3人思い浮かべてください。次にそれぞれの人の名前かニックネームを、■(四角)、◆(菱形)、▲(三角)の横に書いてください。(これは作業上あなた自身が3人を区別するためのものですので、回答し終わったら名前は消していただいて結構です)



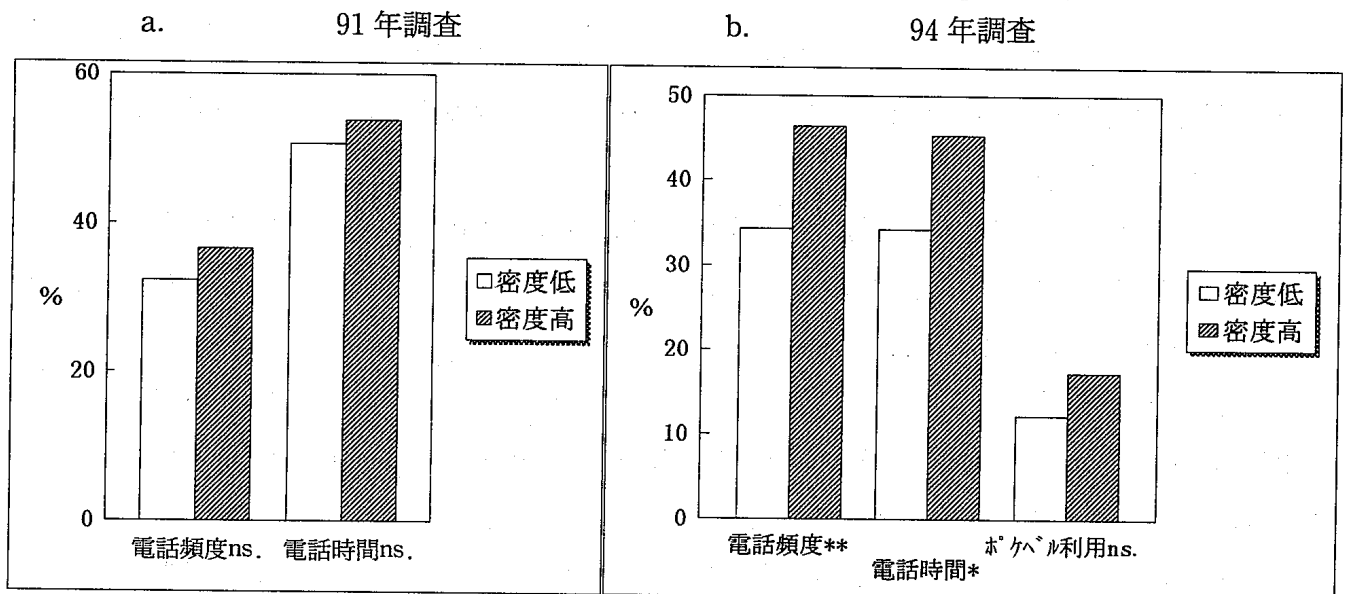
- (1) 平均して、■に書いた人とあなたはどのくらいの頻度で話しますか。あてはまるものの一つだけ○をつけてください。
1. ほとんど毎日    2. 週に1回以上    3. 月に1回以上    4. 月に1回以下
- (2) 平均して、◆に書いた人とあなたはどのくらいの頻度で話しますか。あてはまるものの一つだけ○をつけてください。
1. ほとんど毎日    2. 週に1回以上    3. 月に1回以上    4. 月に1回以下
- (3) 平均して、▲に書いた人とあなたはどのくらいの頻度で話しますか。あてはまるものの一つだけ○をつけてください。
1. ほとんど毎日    2. 週に1回以上    3. 月に1回以上    4. 月に1回以下
- (4) 平均して、■に書いた人と▲に書いた人はどのくらいの頻度で話しますか。あてはまるもの一つだけ○をつけてください。
1. ほとんど毎日    2. 週に1回以上    3. 月に1回以上    4. 月に1回以下
- (5) 平均して、■に書いた人と◆に書いた人はどのくらいの頻度で話しますか。あてはまるもの一つだけ○をつけてください。
1. ほとんど毎日    2. 週に1回以上    3. 月に1回以上    4. 月に1回以下
- (6) 平均して、▲に書いた人と◆に書いた人はどのくらいの頻度で話しますか。あてはまるもの一つだけ○をつけてください。
1. ほとんど毎日    2. 週に1回以上    3. 月に1回以上    4. 月に1回以下

94年調査に先立つ1991年に、私は東京周辺の4大学の学生を対象に、Danowski (1986)の質問を参考に密度と電話利用との関係を明らかにする調査を行った<sup>2)</sup>ここでは普段最もよく話す人を3人思い浮かべてもらい、その3人のお互いの関係をたずねた(図3)。すなわち各関係で当該調査者の親しい人同士が月に1回でも話していれば1、話さなければ0とし、三変数をたしあげて0-3の尺度を作り、その尺度が0と1を密度が低い群、2と3の人を密度が高い群とした。このように測定した密度と電話利用頻度および一回当たりの通話時間との関係を調べたところ、密度の高い群の方が電話頻度が多く、一回当たりの平均時間も長い人が多い傾向があったが、カイ二乗検定の結果、統計的に有意なほどの関係性はみられなかった(図4a.)。

91年調査でははっきりしなかった密度とメディア利用の関係だが、94年調査でははっきり現れている。今度は被調査者に親しい人3人をあげてもらい、その親しい人同士が知り合いかどうかを尋ね、91年学生調査と同様に0-3の尺度をつくり1以下を低密度群、2以上を高密度群として設定した<sup>3)</sup>こうして求められた密度と各メディア利用および欲求との関係をカイ自乗検定で調べたところ

図4 ネットワークの密度とメディア利用(レベルHの割合)

( $\chi^2$ : ns.  $p \geq 0.05$  \* $p < 0.05$  \*\* $p < 0.01$ )





ろ、電話頻度および電話時間との関係が有意であった(図4b.)。すなわちネットワークの密度が高い人の方が電話頻度が高く、一回当たりの通話時間も長かったのである。91年調査でも有意差こそ見られなかったが、94年調査と同様の傾向を持っていたことから、密度が高く一様なネットワークを持つ人の方が多様なネットワークを持つ人よりもよく電話をする、ということはかなり確実なことだといえる。なおポケットベル利用でも同様の傾向は見られたが、その差は有意なほどではなかった。

このように社会的ネットワークの密度が高いほど電話利用が多い、という知見は重要な発見であると言える。それは第一にこの傾向が当初の予想とは全く逆の結果であったからだ。すなわち先に述べたように Danowski 等によれば、放射性が高い(すなわちネットワークが多様な)人ほど、対面接触が制限されがちであるとか共感性が高いなどの理由で、電話利用が多いとされていたからである。では今回発見された傾向はどのように解釈できるのか。親しい人同士がお互いに知り合いであるとは、具体的には村落共同体なり、サークルなり、職場仲間なり、とにかく同一の親密な集団に深く関与しているということだろう。そのような集団に参加していれば会合等の対面接触も活発で、それにともない電話連絡の必要性も増えるのではないだろうか。逆にネットワークが多様な人はそのように深く関与している集団を持たないゆえに電話利用が少ないのではないだろうか。重要性の第二は、この知見が初めに挙げた2つの考えのうち後者、すなわち通信メディアのニーズは対面接触に平行して発生するので、メディアを高度に使う人は「メディア使いこなし人間」である、という仮説に適合的であるということである。すなわち村落共同体などに典型的にみられるように、ネットワークが緊密な集団では、同時に距離的にも近く対面接触が多くなる。従ってそのような対人関係を持つ人は通信ニーズも高くなると考えられるのである。

## (3) 頻 度

社会人類学や都市社会学では、ネットワークの頻度としてつながりの間の相互作用の全てを対象とし、対面接触をはじめ電話・手紙のやりとり・金品の授受などが含まれた。しかし「メディア人間」か「メディア使いこなし人間」かを問う中では、とくに対面接触の頻度が重要である。

表4 コミュニケーション頻度と電話利用 91年学生調査

	コミュニケーション頻度	
	低	高
1週間当たりの通話頻度 (回)*	3.3	3.9
1回当たりの平均通話時間 (分)	29.7	28.3

(分散分析 \* :  $p < 0.05$ )

91年学生調査では図3の質問項目を使い、親しい人とのコミュニケーション頻度を計算した。ここで親しい人のだれとも毎日のように話す機会がない人をコミュニケーション頻度が低い人として、メディア利用との関連を見た(表4)。一回当たりの平均通話時間及び1週間当たりの通話頻度の平均を分散分析した結果、コミュニケーション頻度が多い人の1週間あたりの通話頻度は3.9回、少ない人は3.3回と、頻度の多い人のほうが電話頻度が高かった(有意水準は5%)。また一回当たりの電話時間とは関係がみられなかった。ただ、ここでは単に話す頻度を聞いており、そこには電話も含まれるので、トートロジックな面がある。

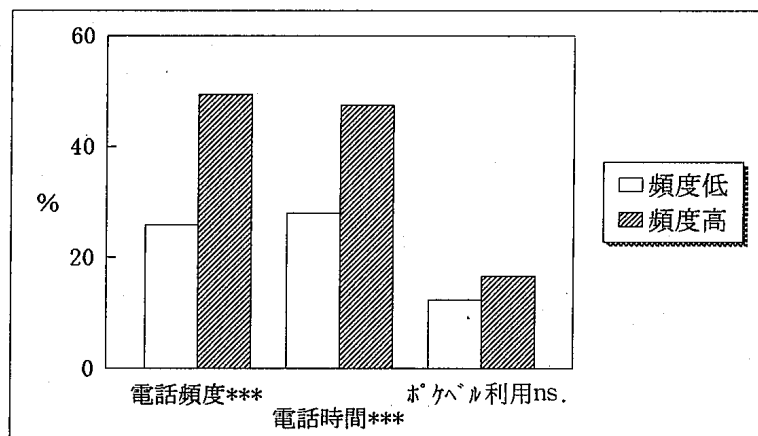
そこで94年調査ではまず、電話と対面接触を分けて調査前日に会って私的な話をした人数を尋ねた。1日に会った人の数で対人接触頻度の多さを測定しようとしたのである。これを今までと同様にH群とL群に分けてメディア利用や欲求との関連を調べた。電話回数が多い人の含まれる割合は高頻度群で42.3%、低頻度群で39.1%、通話時間の長い人は高頻度群で42.7%、低頻度群で37.6%、ポケットベル利用者は高頻度群で18.0%、低頻度群で12.2%であっ

た。高頻度群でメディア利用が活発な傾向がわずかにあるが、カイ二乗検定の結果では、いずれの場合も関連性はみられなかった。この無関係性の原因には3つの可能性が考えられる。第一に実際にネットワークの対面接触頻度とメディア利用に関連性がない可能性。第二に質問の仕方が不適切だった可能性。そして第三に調査時期が不適切だった点が考えられる。調査は夏休みが終わった第一週に行われたが、この期間は夏休み明けということで久しぶりに再開した学友たちと普段とは異なった活発な対面接触が行われた可能性がある。

そこで次に、人と会って話をする人が多い方かどうか、を直接たずねた質問項目から、対面接触頻度をみた。この質問は主観的判断に頼っているという欠点もあるが、全体では61.9%の人が自分は多い方だ、と答えている。これと電話利用との関係を見ると、大変強い関係性が明らかになった。すなわち電話回数の多い人(H群)は、面談頻度が多い群では49.4%だったのに対し、少ない群では25.9%しかいなかった。また1回あたりの通話時間が多い人(H群)も面談頻度が多い群では47.5%いたのに、面談頻度が少ない群では28.0%しかいなかったのである(図5)。この差はカイ二乗検定ではいずれの場合も0.1%水準で有意であった。ここから面談頻度が多い人ほど電話利用(頻度および時間)が多いことがわかる。このことは電話利用が対面接触と代替的關係ではなく、補完的な関係にあることを示唆している。一方ポケットベル利用との関係だが、ポケットベル利用者の割合は面談頻度の多い群で16.6%、低い群で

図5 面談頻度とメディア利用(レベルHの割合)

( $\chi^2$  ns.  $p > 0.05$  \*\*\*  $p < 0.001$ ) 94年調査



12.4%であった。ここでも面談頻度が多いほうがポケットベルを利用する傾向が若干みられるが、カイ二乗検定の結果ではこの差は有意ではなかった。

#### (4) 範 囲

ある人の持っている社会的ネットワークが地理的に広範囲に及んでいる場合、すなわち親しい人が遠距離にいる場合、その地理的障害はメディア利用とどのような関係にあるのだろうか。94年調査では次(問8)のような質問でネットワークの範囲を調べた。

問8 同居の家族以外の人で、あなたの最も親しい人を3人思い浮かべ( )内に名前かあだなを記入して下さい。なお名前は回答のための覚え書きですので問8回答後は消しても結構です。

(A) それぞれの人は現在のあなたの住まいからどのくらい離れたところに住んでいますか。それぞれあてはまる番号一つに○をつけて下さい。

あなたの住まいと相手の住まいとの距離

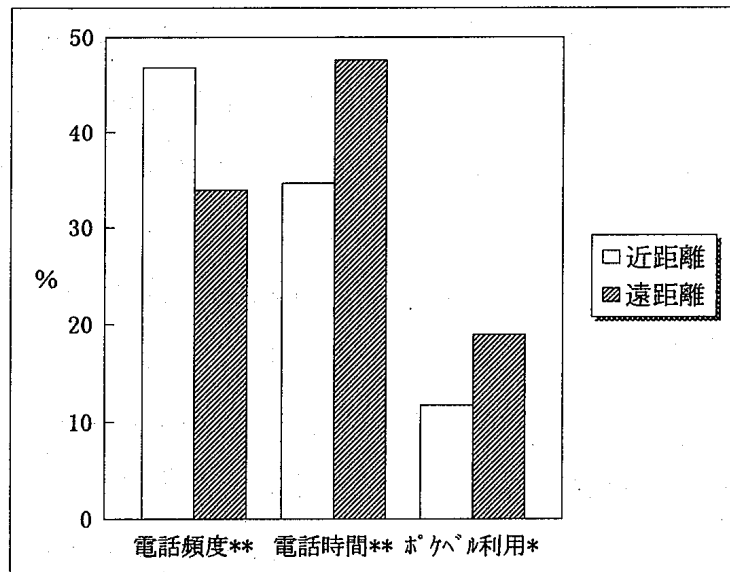
親しい人の名前	100 m以内	1 km以内	5 km以内	30 km以内	30 km以遠
① ( ) →	1	2	3	4	5
② ( ) →	1	2	3	4	5
③ ( ) →	1	2	3	4	5

親しい人の距離によってそれぞれ1から5まで割り当てた。3変数を合計した数によってその人の社会的ネットワークの範囲とし、9以下をすなわちネットワークの範囲の広い人、10以上をネットワークの範囲の狭い人とした。その結果、電話頻度の多い人(H群)はネットワークの範囲の広い人では33.9%しか含まれていないのに対し、狭い人では45.9%もあり、狭い人の方がよく電話をする傾向がみられた(カイ二乗検定の有意水準は1%)。一方一回あたりの電話

時間におけるH群では逆に、ネットワークの狭い人では33.9%しかいないのに広い人では47.6%と、広い人のほうが長電話であった(カイ二乗検定の有意水準は1%)。親しい人が遠距離にいれば対面接触が制限されるために代わりに電話を使うことが多くなると考えがちだが、少なくとも回数面ではむしろ親しい人が近距離にいる場合の方が電話をよくしている。これは親しい人が近くにいる場合は行き来もしやすく、対面接触も頻繁になるので、それにとまって電話連絡が頻繁に行われる、ということなのだろう。

一方、一回当たりの電話時間は遠距離の方が長くなっている。この原因には、遠距離になれば対面接触が制限されるので単に連絡をつけるだけ短時間の通話が減り、会う代わりとして電話でおしゃべりをするが多くなるために、一回当たりの通話時間が伸びる、ということが考えられる。電話会社が行っているトラヒック調査でも、たとえば1992年度ではNTTの市内通話の平均時間が153秒なのに対し160キロ以遠の平均通話時間は251秒と遠距離通話の平均通話時間が長くなっており、遠距離通話の長電話化がみられる。(NTT広報部1993, p.152)。このようにみると遠距離通話には代替の傾向がよみとれる。

図6 社会的ネットワークの範囲とメディア利用(レベルHの割合) 94年調査  
( $\chi^2$ : \* $p < 0.05$  \*\* $p < 0.01$ )



次にポケットベル利用との関連だが、ポケットベル利用者の割合は、ネットワークの範囲が広い人では18.9%、狭い人で11.7%であった。電話頻度とは逆に範囲の広い人の方が利用者が若干多くなっている（有意水準は5%）。

以上述べた社会的コミュニケーションの形態と、電話およびポケットベルの利用との関連をまとめるとつぎのようになる。まずネットワークの規模だが、94年調査では規模の大きく知り合いの多い人の方が電話頻度が大きく、ポケットベルの利用者も多かった。密度についてはDanowskiらの研究では密度が低い（放射的な）人の方が電話をはじめとする通信メディア利用が活発な傾向がみられたが、91年調査ではメディア利用との関連はみられず、94年調査では逆に密度の高い人の方が電話頻度が高く、電話時間も長かった。対面接触頻度については、家族社会学の異居親族関係に関する諸研究では、いずれも対面接触と電話行動に正の相関が見られた。また都市社会学におけるWellmanの研究でも対面接触と電話接触頻度は正比例の関係にあった。94年調査では前日会って話した人の数とメディア利用とは関係なかったが、人と会って話すことが多い人は電話利用頻度が高く、電話利用時間も長かった。ネットワークの範囲については、Wellmanの研究では電話を含む日常的接触の相手のほとんどは移動距離1時間以内の中・近距離に住んでいた。94年調査では親しい人が近距離に住む人は電話頻度が多かった。しかし親しい人が遠距離に住む人の方が1回あたりの電話時間が長く、ポケットベル利用者の割合も高かった。

これまでの所を総合すると、電話やポケットベルというメディアに関しては、よく利用する人は対面的な対人関係も活発な傾向がみられる。すなわち規模が大きく、密度が高く（すなわち一様で）、対面頻度が活発な近距離の社会的ネットワークをもつ傾向である。これは特に電話頻度についてよくあてはまっている。こうしたネットワークの特徴は村落共同体とか学校のサークルといった旧来から存在する緊密な社会集団にあてはまるものである。こうしたことを考えると、これらのメディアをよく利用する人が対面的人間関係を希薄にさせた「メディア人間」であるとは考えられない。逆に旧来型の人間関係が活発で、それ

を補う形でメディアをよく利用する「メディア使いこなし人間」の姿がそこにかいま見られるのである。

#### 4. 通信メディア利用に対する対人ネットワークの位置

以上、社会的ネットワークと通信メディア利用との関係を見てきたが、次に行動様式やデモグラフィック要因など他の変数も入れて、どのような人が通信メディアをよく利用するかをみる。そしてそれらの変数の中で社会的ネットワークに関連する変数がどのような位置にあるのかを検討する。

表5 高レベル(YES)群と低レベル(NO)群の基準

94年調査

夜間外出数	1週間当たりの夜間(9時以降)の外出回数 3回以下=低 4回以上=高
夜遊び	「ふだん1週間に2-3回以上飲み会やカラオケに行く」 はい=高 いいえ=低
学外者と遊ぶ 面談頻度	「学外の人と遊びに行くことが多い」 はい=高 いいえ=低 「私は人と会っておしゃべりをする事が多いほうだ」 はい=高 いいえ=低
恋人あり 対面機会	「私には彼女または彼氏がいる」 はい=YES いいえ=NO 「親しい人と授業やクラブ活動など必然的・日常的に会う機会がないので 思ったようにはなかなか会えない」 はい=低 いいえ=高
自宅	現在の住居: 自宅=YES 下宿・寮・その他=NO

94年調査では行動特性として、夜間外出数・夜遊び頻度・学外者と遊ぶ頻度・恋人の有無・親しい人との対面機会は少なくないか(対面機会)を取り上げ、環境特性としては住居形態(自宅か否か)を、そしてデモグラフィック要因としては性別を取り上げ、それぞれ「高(YES)」および「低(NO)」の2群に分け、通信メディアの利用・欲求のレベルとの関係を見た。各変数のグループ分けは表5の基準で行った。

行動特性等の各変数とメディアの利用・欲求に関する各変数とをクロス集計してカイ自乗検定したところ表6のような結果が得られた。

表6 メディア利用と利用者特性

94年調査

			電話回数(多)	電話時間(多)	ポケベル利用者
ネットワーク特性	規模	大	51.8%	41.4%	20.8%
		小	34.4 **	45.4 ns.	10.3 **
	密度	高	46.4	45.3	17.4
		低	34.3 **	34.3 *	12.2 ns.
	頻度 (4)	高	42.3	42.7	18.0
低		39.1 ns.	37.6 ns.	12.2 ns.	
面談頻度	多	49.4	47.5	16.6	
	少	25.9 ***	28.0 ***	12.4 ns.	
範囲	広	33.9	47.6	18.9	
	狭	46.8 **	34.6 **	11.7 *	
行動特性	夜間外出	多	52.5	32.1	22.8
		少	35.1 ***	43.7 *	11.6 **
	夜遊び	多	50.0	29.4	32.3
		少	39.9 ns.	40.8 ns.	13.7 **
	学外者交遊	多	42.3	48.0	22.3
少		39.5 ns.	35.9 **	11.0 **	
対面機会 不足	有	34.7	41.1	16.8	
	無	43.9 *	38.4 ns.	13.8 ns.	
恋人	有	57.1	46.6	20.5	
	無	33.0 ***	37.0 *	12.3 *	
環境	住居	自宅	29.6	50.4	17.7
		以外	49.0 ***	32.0 ***	12.8 ns.
性別	男	40.1	19.1	14.7	
	女	41.3 ns.	61.5 ***	15.1 ns.	

( $\chi^2$ : ns.  $p > 0.05$  \* $p < 0.05$  \*\* $p < 0.01$  \*\*\* $p < 0.001$ )

### (1) 通話頻度に関わる各変数

電話頻度にはどのような要因が強く関連しているのだろうか。電話頻度の高低を外的基準とし、上述のカイ自乗検定で関連性が認められた8変数(ネット



ワークの規模、範囲、面談頻度、密度、夜間外出数、恋人の有無、対面機会、住居は自宅か否か)をアイテムとして数量化I類による分析を行った(図7)。その結果、電話頻度に最も関係のある社会的文脈は恋人の有無であった(偏相関係数0.218)。恋人が居る人は電話頻度が多くなっている。ちなみに被調査者の約3割(31.6%)に恋人がおり、毎日電話をする人が恋人が居ない人では33.0%に過ぎないのに対し、恋人が居る人では57.1%と倍近くに達している。次に強い関連性があるのは住居形態(偏相関係数0.203)で、家族と同居している自宅学生の通話頻度は下宿生より少なくなっている。この解釈として一人暮らしでは寂しいので対面接触の代替として電話頻度が増える、と考えるのは正しくない。もしそうであれば電話頻度だけでなく一回当たりの通話時間も増えるはずだがそうはなっていないからである(単純にクロス集計すると逆に自宅生の方が通話時間が長いし、後述のように数量化I類で分析すると両者の関連は全く消える)。むしろ、電話と対面接触とのセット性があるとするれば、一人暮らしでは人と会って話をするためには家族外の人しかなく、その結果家の外の人との対面接触が増える。しかも一人暮らしでは外出も自由にできる。したがって自宅外の学生は対面接触のための連絡の必要性が増え、それにともない電話

図7 電話頻度に影響する各変数(数量化I類)94年調査

アイテム	低←通話頻度→高		レンジ	偏相関
規模	小さい !	*****!*****	大きい	0.120 0.120
範囲	遠距離 !	****!***	近距離	0.054 0.056
密度	低い !	*****!*****	高い	0.083 0.088
面談頻度	少ない !	*****!*****	多い	0.147 0.141
夜間外出	少ない !	*!***	多い	0.020 0.019
恋人	いない !	*****!*****	いる	0.221 0.218
対面機会	少ない !	**!*	多い	0.024 0.024
自宅	自宅 !	*****!*****	自宅以外	0.205 0.203
-----+-----+-----+-----+-----				
		-0.06 0 0.06 0.12	重相関 0.402	R <sup>2</sup> =0.162

頻度も増えるのだと考えたほうが良いだろう。電話頻度と3番目に関係の深い要素は対面しておしゃべりをする頻度(面談頻度)であり(偏相関係数0.141), おしゃべりの頻度が多いと答えた人は電話の回数も多くなっている。これも対面接触とのセット性から考えるとうなずける結果である。以下ネットワークの規模・密度・範囲というようなネットワーク特性が続く。一方, 変数ごとのカイ自乗分析では強い関係性が見られた電話頻度と夜間外出数であるが, 数量化I類の分析ではほとんど関係性が見られない。夜間外出の多い人は自宅以外の学生及び面談頻度が多い人に多く, 夜間外出数と電話頻度との関係の強さは疑似的なものであるといえよう。このように電話頻度に関わる社会的文脈を見てきて言えることは, 電話以外の人間関係の活発な人が電話頻度も多いということだ。面談頻度の多い人は言うまでもなく, ネットワークの規模の大きい人も対面接触は活発そうだ。恋人が居る人も恋人同士頻繁に会っているだろうし, 自宅以外に住む人は自宅外の人との人間関係が活発そうだ。そうした社会的文脈が電話利用につながるメカニズムは電話と対面接触のセット性に求められるだろう。すなわち多くの通話では約束や連絡など道具的内容を含んでおり, 用件伝達をきっかけに電話が行われるわけで, 人間関係が活発な人はそれだけ用件も多く発生するために電話頻度も多くなるのである。これは人間関係の活発さという利用者の社会的文脈が電話利用に影響を与えている姿と捉えることができるだろう。

## (2) 通話時間に関わる各変数

頻度と同様に, 一回当たりの通話時間を外的基準に, 関連性が見られた諸要因をアイテムとして, 数量化I類にかけた(図8)。その結果, 圧倒的に性別が通話時間と強い関係にあり(偏相関係数0.377), 女性が長く男性が短くなっていることが分かった。その一方で住居形態と通話時間ではカイ自乗検定で見られた関係性が消えている。これは女子学生は自宅通学が多いので自宅生の通話時間が長くなったため, 自宅学生が長電話につながるという住居形態と電話

時間の関連性は疑似的なものに過ぎなかったということになる。一人暮らしの若者は寂しいために長電話をよくかけ「電話依存的」になると考えられがちだが、この調査データではそうした傾向は全く見られないといえる。性差の影響に隠れがちであるが、面談頻度が多い人や学外の人と遊ぶことの多い人も電話時間が長くなっている。対面でおしゃべりすることが多い人は電話でもおしゃべりすることが多く長電話になるのだろう。対面での行動が電話利用にも影響を与えている例といえる。一方学外の人と遊ぶことが多い人が長電話であるというのは、ふだん学校で日常的に会えない分を電話の会話で補っているからなのであろうか。

図8 通話時間に影響する各変数（数量化Ⅰ類）94年調査

アイテム	短い←通話時間→長い		レンジ	偏相関
	!			
範囲	狭い!	***!****	広い	0.072 0.077
密度	低い!	*****!****	高い	0.086 0.096
面談頻度	少い!	*****!*****	多い	0.130 0.135
夜間外出	多い!	*!	少い	0.011 0.011
学外遊び	少い!	****!*****	多い	0.113 0.117
恋人	なし!	*!***	あり	0.042 0.045
自宅	非自宅!	!	自宅	0.003 0.003
性別	男!*****!*****	女		0.388 0.377

-+-----+-----+-----+-----+

-0.2      -0.1      0      0.1      重相関0.480    R<sup>2</sup>=0.230

### (3) ポケットベルと各変数

1990年代に入ってポケットベルは若者の間に急速に広がりだした。学生に対する94年調査でも普及率は15.8%と通信メディアでは電話につぐ高い利用率となっている。また所有欲求も93年調査では35.8%、94年調査では29.8%と一定の高さを示し、今やマイナーメディアとは言えなくなってきた。94年調査ではカイ自乗検定においてポケットベル利用と夜間外出回数・夜遊びの頻度・学外者と遊ぶ頻度・恋人の有無等との関連が見られた。有意な関連の見られた

変数をアイテムに、ポケットベル利用の有無を外的基準として、数量化Ⅰ類による分析を行った(図9)。その結果レンジでは夜遊びの頻度が多い者が利用及び欲求に最も影響していた。偏相関係数でみると利用に高い影響を与えているのはネットワークの範囲と夜間外出数と学外者と遊ぶ頻度である。すなわち親しい相手が比較的遠くに住み、アルバイトや遊びで夜間外出しがちで、学外者と遊ぶことの多い者がポケットベルを利用しているのである。

図9 ポケットベル利用に影響する各変数(数量化Ⅰ類) 94年調査

	←しない ポケベル利用 する→		レンジ	偏相関	
範囲	狭い!*****!*****	広い	0.083	0.117	
規模	小 ! *****!*****	大	0.071	0.099	
夜遊び	低 ! **!*****!*****	高	0.135	0.095	
学外と遊ぶ	低 ! *****!*****	高	0.080	0.109	
恋人	なし! ****!*****	あり	0.063	0.084	
夜間外出	低 ! *****!*****	高	0.090	0.116	
-----+-----+-----+-----+-----					
	0	0.04	0.08	0.1	重相関 0.282 R <sup>2</sup> =0.079

#### (4) 社会的ネットワークの位置

以上、他の変数を入れた多変量解析をした結果、社会的ネットワークに関する変数について言えるのは、次のようなことである。第一に、影響の方向性に関しては多変量解析でもクロス集計と同様の方向性が確認された。すなわち電話頻度を多くするのはネットワーク規模が大きく、密度が高く、面談頻度が多く、範囲が狭い場合であり、電話時間を長くするのは密度が濃く、面談頻度が多く、範囲が広い場合で、ポケットベル利用者を増やすのは規模が大きく、範囲が広い場合であった。第二に、しかしメディア利用に影響を与える要因としては、社会的ネットワークに関する変数は他の変数より主要な位置を占めていなかった。とくに1回あたりの電話時間については、性別の影響が絶大で、社会的ネットワークの影響はそれに隠れがちであった。それでも電話頻度やポケットベル利用については一定の影響力を持っている。すなわち電話頻度にお

いては面談頻度やネットワーク規模が、ポケットベルについてもネットワークの範囲や規模は他の変数と並んで重要な変数となっていた。

## 5. おわりに

以上、通信メディア利用と社会的ネットワークの関係を電話およびポケットベルについて考えてきたところ、メディア利用が活発な者が対面接触をふくめた社会的ネットワークが不活発な傾向はみられなかった。ここから電話やポケットベルの高度利用者がメディア上の関係に閉じこもりがちな、メディアおたく的な「メディア人間」である可能性は少ない。逆に、こうしたメディアをよく利用する若者は、知り合いが多かったり、対面接触が活発であったり、恋人がいたり、夜遊びが活発であったりした。こうしたことから、通常の間関係が活発な者がそれを補完するために通信メディアを使いこなしている様子が見えてくる。

たしかに高度情報化が進むにつれて、対面的なコミュニケーションに類似したものが技術的に可能になり、また利用も増えてくるだろう。しかしだからといって、かならずしもこれまでの対面的コミュニケーションがそれらに代替され、既存のコミュニケーションが弱体化するわけではない。技術的可能性をその結果に単純に結びつける発想は避けるべきである。そうではなくて、メディア上のコミュニケーションを生活全体の中でとらえる、実証的な研究が必要とされるのである。

そうした観点から、今回はこれまでよく利用されてきた電話とポケットベルを取り上げたわけだが、情報化社会における人間像を考える上ではまだまだ不十分である。今後はとくに現在急速に増加しつつある、コンピュータおよびコンピュータ通信の利用と対人関係の関連についても、さらなる調査、研究が必要であろう。

## 注

- 1) この質問文は前年に松山大学で行われたパーソナルネットワークに関する調査(松山大学社会調査研究室, 1994.)を参考に作成した。
- 2) 調査は東京周辺の4大学(武蔵大学178人, 駿河台大学151人, 白百合女子大学70人, 東京大学33人)の授業参加学生432人(男45.6%, 女54.4%)に対して自記式質問紙調査を行った。調査実施は91年10月2日及び10月8日の2日。
- 3) 91年学生調査も94年学生調査も密度の計測においては0-4の尺度を構成し, 社会人類学における密度を求める公式( $200Na/n(n-1)$ )で得た数値とは全く異なるように見えるが, その意味するところは数字が%か0-3の尺度で異なるだけでほぼ同じになる。例えば図5-1の第一次ゾーンの密度は66.6%だったがこれは今回の尺度では2にあたる。ここでは0%→「0」, 33.3%→「1」, 66.6%→「2」, 100%→「3」と対応する。両者が決定的に異なる点は今回の測定が①第一次ゾーンに限定され②に対人ネットワークの人数を4に固定している点にある。
- 4) ここで頻度とは, 前日に会った人の数が多い人のことで, 面談頻度とは「私は人と会っておしゃべりをする人が多い方だ」に「はい」と答えた人の割合をさす。

## 文献

- Aronson, S. H., The Sociology of the Telephone, *International Journal of Comparative Sociology*, 12, 1974, 153-167.
- Barnes, J. A., Class and Committees in a Norwegian Islands Parish, *Human Relations*, vill. 1954.
- Bott, E., *Family and Social Networks*, Tavistock Publications, 1957.
- Boissevain, J. *Friends of Friends: Networks, Manipulators and Coalitions*, 1974 (岩上真珠, 池岡義孝訳『友達の友達』未来社, 1986)
- Claisse Gerard, Domestic Telephone Habits and Daily Mobility, *Transportation Research Part A*, Vol. 27, Iss. 4, 1993. pp. 277-90.
- Cook, J. B., Public Relations Role and Organizational Communication Behaviors, Master's thesis, University of Wisconsin, 1982 (cited in Danowski, 1986)
- Danowski, J. A., Network Structure and Use of Organizational Computer-Mediated Communication and Teleconference, Monograph, University of Wisconsin, 1982.
- Danowski, J. A., Interpersonal Communication Network Radiality and Long Distance Telephone Behaviors and Attitudes, Paper presented to the International Communication Association, 1985.
- Danowski, J. A., Interpersonal Network Structure and Media Use: A Focus on Radiality and Non-Mass Media Use, Gumpert, G and Cathcart, R. eds. *Inter/*

- Media*, 1986, 168-175.
- Gumpert, G., *Talking Stones and Other Tales of the Media Age*, Oxford Univ. Press, 1978 (石丸正訳『メディアの時代』新潮社1990)
- Fischer C. S., *The Urban Experience*, Harcourt Brace Jovanovich, 1976.
- Fischer C. S., *To Duell among Friends*, University of Chicago Press, 1982.
- Fishman, L. T., Prisoners and their wives: Marital and domestic effects of telephone contacts and home visits, *International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology*, Vol. 32, 1988. pp. 55-66.
- Litwak E., The Use of Extended Family Groups in the Achievement of Social Goals: Some Policy Implications, *Social Problems*, Vol. 7, 1960, pp. 177-87.
- 松山大学社会調査研究室『1993年度調査報告書 大学生の友人ネットワークの実態』松山大学1994.
- Mitchel, J. Clyde (ed.), *Social Networks in Urban Situation: Analysis of personal Relationships in Central African Towns*, Manchester University Press, 1969. (三雲正博・福島清紀・進本真文訳『社会的ネットワーク～アフリカにおける都市の人類学』国文社1983.)
- NTT広報部『NTTデータブック'93』1993.
- 関孝敏「都市家族の親族機能に関する一考察」『広島修道大論集』18-1, 1977.
- 『新社会学辞典』有斐閣, 1993.
- Sussman B. M., The Help Pattern in the Middle-Class Family, *American Sociological Review*, 18(1)1953. pp. 76-81.
- Webber, Melvin, The Urban Place and the Nonplace Urban Realm, Melvin Webber(ed) *Explorations into Urban Structure*, University of Pennsylvania Press, 1964.
- Wellman, Barry, Peter J. Carrington, and Alan Hall, "Networks as personal communities", Barry Wellman, S.D. Berkowitz (eds), *Social structures: a network approach*, 1988.
- Wellman, Barry, Who Needs Neighbourhoods?, Allan Powell (ed.) *The City Attacking Modern Myths*, University of Toronto Press, 1972.

\*本稿は1994年度松山大学特別研究助成金による研究成果の一部である。